

	(特集)	
英	語	の
	語	彙

英和辞典の見出し語選定と重要度ランク表示



■英和辞典の見出し語数

『ジーニアス英和辞典』初版が刊行されたのは「コーパス以前」の1980年代後半だが、当時、英和辞典の見出し語数は、

- ①高校生用初級：3～5万
- ②高校生用中級：5～7万
- ③高校生用上級・一般用中辞典：7～12万
- ④一般携帯用小型辞典：6～8万
- ⑤大辞典：12万～

というのが、だいたい「共通理解」だった。

現在も、大ざっぱにはこんなところだが、特に①に分類される辞書については多様化が進んで、その記述方針・性格の違いが大きくなり、収録語数はあまり問題にされなくなっている。また、電子辞書の普及によって、特に一般用の辞典の様相が大きく変化し、④はほとんど電子辞書にその役割を譲り、⑤については、詳しい説明のあるタイプの大辞典と、説明は比較的簡単で多くの語数を収録するタイプのものとに分化した。

■ジーニアス初版の場合

小社『ジーニアス英和辞典』初版の編集は、「見出し語7万5千程度の中辞典」を作るという方針の下に進められた。しかし、原稿執筆を開始した1980年当時は、語の使用頻度についての資料はきわめて限られていたし、日本の大学関係者が利用できるコーパスもなかった。そこで、実際には、何冊かの既存の英英・英和辞典の見出しを参照して、必ず収録すべきと思われる語を選び出し、これを仮執筆リストとして執筆を始めた。こ

れに、執筆・校閲の途中で、手分けして収集した資料カードなど他の資料によって見出しを追加していくという方法をとった。

原稿執筆は単純にAから順にというわけではなく、重要語とそれ以外の語の記述の仕方をはっきり変えて辞書に濃淡をつけるという方針によって、まず一般語をA・BランクとCランク以下とに分けて執筆にあたった。さらに機能語（助動詞・前置詞・接続詞・冠詞など）は別にして1人の人が担当し、また動物名・植物名など、「分野別」の執筆を行ったので、これら「別扱い」の語のリストを作って一般語リストからは除外する作業が必要だった。

パソコンもワープロもないころなので、こうしたリスト作成や執筆项目管理には膨大な手間がかかった。

こうした事情に加えて、校正の最後の段階まで見出し語の追加・入れ替えを行ったために、作業中は見出し語数を正確に数えることができなかった。本ができあがってから、あらためて人を頼んでカウントしたところ、7万5千をだいぶ超えていることが確認され、ほっとした記憶がある。

なお、ここでいう見出し語数は、「追い込み派生語」（例：形容詞の項目の末尾にある～ly, ～ness）, 「分離複合語」（2語以上からなる複合語；例 table knife—ジーニアスではtableの末尾に～knifeの形で収録）を含めたものである。

■見出し語の重要度ランク

『ジーニアス英和』初版編集のときには、見出

し語の重要度によるランク決定のための資料もわずかしかなかった。例えば、Thorndike=Bahnhart の 3 万語の頻度資料というのがあったが、内容が古かったこともあり、主に非重要語の収録の参考にした。

重要語については、だいたい A ランク＝中学で学習する語、B ランク＝高校で学習する語、という考え方をとった。そのため、日本の英語教育の事情への配慮が必要なので、中学校教科書に現れる単語・イディオムについての資料（速川浩編；小社刊）や全英連編『高校基本英単語活用集』、および高校の英語教科書、さらに大学受験用の英単語集などを参考にした。しかし、最終的には、編者の英語教育の経験やバランス感覚に基づく判断によった部分もある。

『ジーニアス英和』の重要度ランクの語数と内容については、その後の20年で、改訂のたびに検討を加えてきたが、現在の『ジーニアス英和辞典〈第4版〉』（G4）では、コーパスによる調査を踏まえて、これまでで最大の変更を加えた。高校の教科書で扱う単語数や、大学受験で必要とされる語数の変化ももちろん反映されている。そのほかに、TOEIC 頻出の語彙、米英の生活語彙などの資料も参照した。

結果として、G4 では、A ランク約1150語、B ランク約3100語となっている（詳しくは『GCD 英語通信』No. 40（2006.11）の「見出し語のランク見直しについて」参照）。

■ジーニアス英和大辞典の重要度ランク

一方、『ジーニアス英和大辞典』の見出し語ランクは、大辞典というものの性格上、ほぼ純粋に頻度によって、最重要語 約3500語、これに次ぐ重要語 約5400語を選定した。大辞典の編集時にはコーパスが（後の G4 のときより小規模だったが）使えるようになってきていたために、これが可能になった。

英語が使用される一般社会での頻度を基にして

いるので、例えば、fighter, financing, fleet, flexibility, forum, foster のように、G4 では C ランク以下（4250語レベル以下）の語が大辞典では最重要語（3500語）に入っている場合がある。

ただし、コーパスに収録された資料の偏りに起因すると思われる頻度の差異は、他の資料によって調整するようにした。また、固有名詞については、日本での必要性の観点から「アジア重視」の方向で検討を加えた。英米の一般向けの大きめの辞典に収録されていない中国・朝鮮半島の人名・地名が、重要語にはしていないが、『ジーニアス英和大辞典』にはかなり入っている。

■収録語句数の数え方

辞典によって、その公称収録語句数の表示の方針は少しずつ異なっている。G4 で「見出しが 7 万 9 千」と言っているのは、上記のように、通常の見出し語・追込み派生語・分離複合語を含んだものである。これに成句（イディオム）を加えて、「収録語句は 9 万 6 千」と表示している。

辞典によっては、語形変化の欄に記された規則変化の変化形を収録語句に含めていることもあるようだし、また、主に英英辞典では、用例中やや固定的な言い回しを成句に準ずるものとして太字にし、これを entries として数えていることが多い。

異綴りや、成句については、単語に比べて数え方による数の違いが大きくなる。成句にはしばしば、さまざまなヴァリエントがあり、2 つ以上の同義の句が＝でつながって成句見出しになっていることがあるし、（ ）[] など語の省略可能・入れ替え可能が示されていることも多い。これらについて、可能なヴァリエントを細かく数えていけば、実質的な収録語句数は、通常見出しとしてデータ上でカウントされる数よりかなり増えることになる。

辞典の収録語句数というのも単純ではない。

（大修館書店編集部）